

程極明著『洪流』(2005年、北京中国青年出版社)

翻訳(抄訳)紹介にあたって

\*著者紹介

程極明氏は、1929年、中国南京市生まれ。八七歳。南京市に奥様(九〇歳)と共に住む。1947年より51年、復旦大学ジャーナリズム学科に学ぶ。1955年より65年、共青团中央国際連絡部に従事、うち1955年からの3年間は、国際学連書記局書記としてプラハに在住。文革後江蘇省社会科学院情報研究所長及び世界経済研究所長を務める。

\*あらすじ

主人公 林家宝は1937年の夏、八歳の小学5年生。父は南京で大きな布地屋を営んでいた。7月7日の盧溝橋事件以降、拡大した日本軍の攻撃は、幼い少年と家族、親族、友人たちの生活を一変させ、巻き込んでいく。すっかり荒れ果てた南京の街。やがて中学から高校に進むにつれ、姉の秀華とその友人たちに多くの影響を受け、従兄弟の希鷹らとも祖国の将来について話し合う。1945年8月15日、日本の降伏は多くの人々に希望をもたらした。国民党と共産党の協力で、遅れた中国はようやく新しく生まれ変わると信じた。しかし事態はそうはならず、やがてそれは打ち砕かれていく。

高校自治会での、国民党三青团との軋轢、闘争、友人たちとの交流、そして復旦大学での厳しい闘いへと続いていく。その大きな流れ(洪流)の中に彼らの青春がある。

\*訳者から

中国を訪ねる度にその広大な自然や悠久の歴史に圧倒される。そしてそこに住む人々の今の生活を眼にし、中国の近代化の歩みと日本による侵略、その後の内戦から社会主義中国への歩みにぶつかってしまった。なぜ国民党でなく共産党なのか、その激しい闘いの時代を生きた人たちの青春がここに描かれている。

2009年1月1日に著者を訪ねたとき、奥から聞こえてきた「インタビューショナル」のピアノのメロディ。「七十歳の誕生日に妻に贈ったのです。若い頃にはそんな状況ではありませんでしたからね。」とやさしく微笑まれた。できるなら翻訳したいと思いつつ辞した。(492頁の長編のため、抄訳となる。)

井手淑子

日中友好協会会員・京都府在住  
東京外国語大学中国語科卒

# 洪流

程極明

## 1 一九三七年夏の南京

長江流域にある南京は、武漢、重慶と並ぶ「三大かまど」の一つ。1937年の夏はとても暑かった。

八歳の林家宝（小宝と呼ばれる）は、庭の竹製ベッドに水をまきゴロゴロしていたが、いつの間にか室内でぐっすり眠っていた。翌朝（7月8日）のラジオは女性アナウンサーが声を震わせ、盧溝橋での日本軍の攻撃、日中戦争の勃発を報じていた。小宝は中国と日本が戦争してい

ることを初めて知った。若い店員たちは当時まだ珍しいラジオを囲んで議論していた。

「わが国は国土も広く、4億5千万もの人がいるのだから、きっと日本を負かすだろう。」

「じゃ、日本人はどうして我が東北三省を占領できたんだい？あっちは飛行機やタンクがこっちより多いんだぜ。」

「そんなに悲観しなくてもいいよ。僕は蔣委員長を信じてい

る。」

もうすぐ小4になる小宝は、どの意見が正しいのかよくわからなかったが、中国は必ず勝つと思っていた。その日の学校で

は、先生が有名なフランスの作品『最後の授業』を読み聞かせ、子供たちに亡国の民になりたいかと訊ねた。みんな「なりたくない！」と叫んだ。

8月15日からの日本軍による空爆は日増しにひどくなり、住宅地にまで及んだ。最初は勇敢に迎撃していた国民党軍も、ついに飛行機は爆撃し尽され、南京はまるで無防備都市となった。日本の飛行機は南京の空を自由に、低く飛び回った。人々

は「蒋介石はどこに行ってしまったのか?」「蔣委員長は一体何をしているのか?」「誰が自分たちを助けに来るのか?」などと話していた。

小宝の同級生の家に空からの爆弾が落ち、数人の黒焦げの遺体が残った。小宝には初めて見る死体である。布地を扱う大きな商家である林家は、広い防空

壕を造っていたが、もはやこの街を離れるしかなかった。父と叔父たちで三日三晩相談した拳句、一人は武漢へ、父ともう一人は蕪湖という町へ行くことにした。これを伝え聞いた友人たちも含め、総勢百人ほどが貨車一両を調達して行くことになった

た。

『きっと安全だと思いますよ』

と請け合った。

## 2 蕪湖の街で

彼には妻も妾もいたが、子供

はいなかったので、喜んで子供

出発の前に小宝はおばあちゃ

たちを庭園や書齋にも自由に入

んと従兄の希鷹に別れを告げた。

らせた。書庫には書画骨董も多

首都南京から列車で4時間余り、

く、それを見せながら『我が中

蕪湖は長江沿岸の静かな人口十

国には、5千年の悠久の歴史と

数万の街で、物資も豊かな「魚

輝かしい文化がある。元々清は

米之郷」の一つである。百人も

かつて中国を支配したが、漢族

の大所帯なので心配された住ま

は最後に勝利した。日本人も我

いも、すぐに良い借家が手に入

が中国を征服できないだろう。』

った。

と話したりした。祖父を知らな

大家は、町の有名な薛鼎成と

い小宝はこの白いひげのおじい

いう弁護士で、広い屋敷を持つ。

さんを好きになった。

3階建ての洋館と80軒もの中

ほどなく暮らしも落ち着き、

国風の平屋である。正装して挨拶

大人たちは午後はマーシヤンを

拶に行った林明卿にこの主人は

やり、子供たちは集まって遊ん

だ。父も昼間は仕事に忙しかつたが、夜には余裕もでき、家の者たちとおしゃべりした。する戦略に変えた。そのため蕪湖が真つ先に攻撃されることになった。

小宝はお父さんの話から、林家の郷里が安徽であること、曾祖父は全く土地を持たない日雇い農民であったが、太平天国軍の役夫として南京に来たこと、その後苦勞して質屋の番頭になり、三〇歳の若さで亡くなったことを知った。父は転々と職を変えながらも、第一次大戦後に発展してきた紡績業に目をつけ遠縁の力を借りて店を始めたらしい。

国民党の軍隊は、まだ日本軍の影すら見えない時点で早々と撤退を始めた。前線から退いてきた敗残兵は、一人また一人とゆっくり歩いていく。肩には銃すらなく、ただ片方の靴だけ履いた者や、麻袋をぶら下げた者など、小宝たちにはつらい光景だった。

これが自分たちの国の軍隊？自分たちは間もなく亡国の民になるのか？ 通りに立って、夕方まで眺めていた。一晚中眠れなかった。彼の心の中の崇高な国軍、それが戦わずして退いた

のだ。いったい蔣委員長はどこにのぼり、腹這いになって辺りに？ 数日のうちに警察も逃げ、を観察した。至る所火の海、家怖くなった人々は皆去り、三つがパチパチと燃えていた。怖さの住民グループのみが残された。に耐えながらも大人に代わって小宝の父は同行した皆に、それやった初めての命がけの試練だそれ好きにしてもいいと言った。った。

が、結局みな残る道を選んだ。 ある夜、火は薛家の隣を焼いた。林明卿は『この家は火事になる。何とかして逃げてくれ。申し訳ない。』と言い、みんな涙を流して互いに別れを告げた。

### 3 蕪湖の日本軍

日本軍が蕪湖の町に進軍してきた。実際には空っぽの都市を占領し、まず道路沿いに放火、と音がして屋敷の左手の防火壁全ての住居を焼き、蕪湖全体をが倒れた。隣の大火事を消した。十日十晩焼いた。助かったのだ。『観世音菩薩さ

薛家は市のはずれにあったが、ま！』林明卿はひざまずき、頭日一日と炎が迫ってきた。小宝を地面に3回つけお辞儀した。は暗くなると、3階のベランダ 子供から老人まで涙を流してひ

ぞまずいた。

1か月に及び日本軍の狂気の振る舞いの後、各地に布告が貼られ、「大日本帝国の臣民となるよう希望する」とあった。避難していた農民たちも戻ってきた。

屋敷の人たちにも初耳だったが、無論みんなを守るためであった。駐蕪湖司令官がすぐにやって来て、入り口に「大日本帝国の士官は勝手に入るべからず」と告示した。

ある日、3人の日本兵が薛家に乗り込んできた。客間の入り口で迎えたのは、黒いスーツにネクタイ姿の薛弁護士だった。『よくいらっしやいました。あなた方はどんなご用件でしょうか?』と流暢な東京弁で言った。

しかし、日本兵はこの告示を意にも介さず好きな時に邸内に入ってきた。とくに酒に酔って来ては、『女をよこせ』と騒いだりした。

3人の兵士は驚いて、態度をやわらげた。客間に先ほど掛けられたばかりの「東京帝国大学卒業」の証書を見て、しきりにお世辞を言う。日本留学はこの

ある日、酒に酔った日本兵が、銃を持ち押し入り、一人の若い奥さんを強姦した。それからというもの、女たちは一番奥に住んだ。かまどの燃え殻を用意し、警報が鳴ったら、顔を灰でぬぐい、倉庫の二階で、麻袋に身を

包んだ。小宝ら子供たちは分かれて見張りの番をし、『日本兵が来るぞ』と叫ぶ。彼女たちは時には日に何度も隠れた。

1か月後、司令官が再三再四、薛家を訪ね、弁護士に「蕪湖治安維持会」会長に就くよう迫った。『私は売国奴にはならない。薛家は代々清廉な役人だった』と断る彼に、みんながこれ以上抵抗しないで頼み、ついに名前だけの会長を受け入れた。

#### 4 そして南京では

林家の一行が南京を離れたのは10月末。8月の上海戦以来、中国軍は2か月半勇敢に抵抗し

ていたが、11月8日、蒋介石はついに撤退命令を下し、国民党政府は重慶に移っていった。

南京戦の直前、ドイツ、アメリカ、イギリスなど欧米人が金陵大学病院、金陵大学、金陵女子大を中心とする「南京難民地区」を作り、中日両国政府に通報した。しかし日本政府は認めなかった。住民たちも続々と去ったが、離れられない多くの人々は、「難民地区」に望みを託し、そこに移っていった。

日本軍は12月7日に南京攻撃を始めた。林家も焼かれ、留守を預かっていた店員の小王は母と妹を連れて、金女大の難民地区に行った。教室には多くの



人がひしめき合い、行列して粥をもらった。校長のアメリカ人華文史は『私たちアメリカは中立国だから、日本人は国際法を守らなければならない』と訴え、みんなもそれを信じていた。

12月13日、日本軍は中華門、光華門、中山門の三つの城門から南京に突入し、6週間にわたる血なまぐさい大虐殺が始まった。あらゆる通りや寺院、教会でさえ、武器を捨てた兵士、子供や老若男女、妊婦や僧侶、尼僧、牧師や修道女までもが公然と殺害された（訳注）。

その年の冬はとりわけ寒く、雪がしんと降り、鼓楼の両側には積み上げられた死体が凍

り、硬直した人垣となった。春になってようやく、埋められた。

多くの善良な市民たちは、中華民族の歴史において、日本人に申し訳ないことがあったらどうか？ 日本人を侵略し虐殺したことがあったらどうか？ 彼

らは畜生にも劣る、日本人を日本鬼子と呼ぶのは、まだやさしすぎると思った。涙はすっかり乾ききって、眠りにつけなかった。恨みを心の奥深くしまいこんだ。そして日本の軍刀と軍靴で南京が踏みにじられるのを、しっかり見ていた。

難民地区も安心な場所ではなかった。ある日、銃を肩にした日本兵が数百人押し寄せ、抗議

を無視して数百人の若い女子を奪い去った。小王の妹もその中にいたが、誰一人帰ってこなかった。みな侮辱され踏みにじられた身体で、長江にたどり着き身を投げた。数日後小王の母親も首を吊って自殺した。

(訳注) いわゆる南京虐殺の人数には諸説あるが、日本軍の要請により遺体を埋葬した中国紅十字(赤十字)会の記録では、4万3123人、民間団体が1万2267人、それ以前に焼かれたり、長江への投棄なども含め、約30万人と中国側は発表している。